

を保持できる換算方式などを検討したが、結局、従来の4杯の代りに3杯をとり入れ、平均風速を算出できるようになった。3杯とエーロベンとで瞬間風速を出す場合、統計資料としての面から調査中である。要するに新測器を業務に取入れるとき、かなり古い従来の古い資料を全部廃棄するのではなく、これを生かしてつなぎ合わせる合理的方法が必要なのである。その他気温の平均として、3回がよいか、24回がよいか（場所によっては0.5°Cもちがう）また観測所の移転にともなうちがいをどう処置するか（たとえば函館）も問題である

三寺 気候図の信頼性は？

斉藤 たとえば等温線がひいてあるが、これは各点の推定をするのに用いるべきでなく、地理的分布についての概略を大雑把にとらえる程度と思う。

佐藤（順） その際海面更正はしてあるか？

斉藤 それはやっていない。

高橋（浩） 風の統計をとる場合、エーロベンがよいか、ロビンソンをどうするかの問題は？

斉藤 瞬間値についてはエーロベンと3杯（発電）をとっており、平均は3杯にきめたが、これまでやってき

た10分間平均は synoptic な面その他を考え検討が必要なことは事実だ。

高橋（浩） いづれも同じでないか、synoptic といってもあまりちがいないし、むしろ地形の影響が大きい。

斉藤 それなら問題ない、私もそう考えたい、私も地形の影響がより重大と思う。

藤田（気研） 風についてももっと3次元的な統計が望ましいと思うが。

斉藤 それは大切なことで、高層課と連絡して整備すべきだと思う。

藤田 数値予報などでも業務として上層の資料をつかいつつある。今後やって頂きたい。

小沢（気研） 社会生活に対応して、要素のとり方、きめ方も考えねばならないと思うが。

斉藤 それは考えたい。たとえば、明るさの程度、degree day などの統計などはいわれるとおりに確かに必要で、いま調査的に試みているが、なお検討したい。

要するに、業務統計をどうするか、調査統計として具体的にどんな面をとりあげるか、これまでの討論を参考にししてやってゆきたい。

〔書評〕

藤巻時男著 “天気と元氣”

(B6判 184頁, 230円, 文芸春秋新社発行)

著者の藤巻博士は、慶大付属月ヶ瀬温泉治療学研究所主任として永く勤務され、一昨年(1978)の狩野川台風の時(1978)には、ラジオの気象通報と自分の観測結果とにもとずく判断で、同所流失前に入院中の患者と職員を避難させ、多勢の生命をまもったことで有名な人である。

この本は著者の温泉医学、気象医学に関する永年の研究と体験をもとにして書かれた気象医学の書物である。内容は第1部 “天気と元氣”、第2部 “月ヶ瀬の教訓” にわけられている。第1部は気象医学の解説で、“病いは気から”、“気候とからだ”、“日本の気象”、“気候と病氣”にわけて説かれている。そこには著者の人柄からにじみ出るユーモアが多分にたたえられて、思わず微笑を誘われる節も多い。ストレッサーやストレスについてもかなり詳しく記してあるし、気象医学研究のむずか

しさから、総合的につかむものとして気団や前線の重要性を強調している。

第2部は狩野川台風の思い出を記したものである。このことについては、かつてラジオ東京の“科学の手帳”の時間に、著者と評者として対談をやったことがあり、その時にも医学者でこんなに気象をよく知っている人がいるのだろうかと思ったことであった。

著者はあとがきに“変わった医学部門として素人の方にも医師にも一読して載せたい”と書いておられるが、評者はそのほかに気象屋もこれを読んで、気象医学に理解を持って頂きたいと思う。そして将来何かの形で気象医学の予報なり注意報なりが行なわれるようになることを期待したい。

島山久尙(東京管区気象台長)